

2025年8月27日(水)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 10:38 ■ 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1101-03] スポーツ人類学／口頭発表①

座長:中嶋 哲也(茨城大学)

9:40 ~ 9:58

[12人-口-01]

身体の国民化

戦前の野外教育に着目して

*田中 安津子¹ (1. 九州大学大学院)

10:00 ~ 10:18

[12人-口-02]

台湾における武徳殿の活用についての一考察

「高雄市武徳殿」での剣道実践者を対象として

*三宅 智子¹ (1. 天理大学 大学院 体育学研究科)

10:20 ~ 10:38

[12人-口-03]

民俗芸能の衣裳・装備の変遷におけるスポーツ人類学的一考察

長野県南伊那地域の屋台獅子の活動を中心に

*松本 彰之¹ (1. 飯田短期大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

⌚ 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 10:38 🏢 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1101-03] スポーツ人類学／口頭発表①

座長:中嶋 哲也(茨城大学)

9:40 ~ 9:58

[12人-口-01]

身体の国民化

戦前の野外教育に着目して

*田中 安津子¹ (1. 九州大学大学院)

10:00 ~ 10:18

[12人-口-02]

台湾における武徳殿の活用についての一考察

「高雄市武徳殿」での剣道実践者を対象として

*三宅 智子¹ (1. 天理大学 大学院 体育学研究科)

10:20 ~ 10:38

[12人-口-03]

民俗芸能の衣裳・装備の変遷におけるスポーツ人類学的一考察

長野県南伊那地域の屋台獅子の活動を中心に

*松本 彰之¹ (1. 飯田短期大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

■ 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 10:38 ■ 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1101-03] スポーツ人類学／口頭発表①

座長:中嶋 哲也(茨城大学)

9:40 ~ 9:58

[12人-口-01] 身体の国民化

戦前の野外教育に着目して

*田中 安津子¹ (1. 九州大学大学院)

野外教育とは自然の中で組織的、計画的に一定の教育目標をもって行われる自然体験活動の総称である。自然体験活動とは、自然の中で、自然を活用して行われる各種活動であり、具体的には、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽界といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動と言われている。現在行われる野外教育に影響を与えている活動の起源として、アメリカで1860年にThe Gunnery Camp、ドイツで1896年にワンダーフォーゲル、1909年にユースホステル、イギリスで1907年にボーイスカウトがある。野外教育の基礎となる活動が開始された時期は1900年前後にほぼ集中しており要因として、産業革命に伴い、都市に人口が集中した結果自然と隔絶されたばかりではなく都市住民の生活環境が悪化したことが挙げられる。また、19世紀末から20世紀にかけては帝国主義の時代であり、国民養成の手段として野外教育が普及したことも背景にあると考えられる。

野外教育が広まる背景となった明治時代から戦前にかけては、日本人の身体技法がおきく変容した時期である。近代国民国家の形成、資本主義の成立といった近代化の過程において、様々な視点から個人の身体はつくりかえられていった。「近代的な身体」を作るために国民の体力を向上させ国家が求める軍事力のみならず、市場が要求する労働力を担当させる必要もあった。このような時代背景の中発生し普及していった野外教育は、いかにして身体の国民化に寄与したのだろうか。

本研究では理論的背景としてミシェル・フーコーの規律訓練を取り上げ、野外教育における主体の形成と身体の国民化について考察を行う。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

📅 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 10:38 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1101-03] スポーツ人類学／口頭発表①

座長:中嶋 哲也(茨城大学)

10:00 ~ 10:18

[12人-口-02] 台湾における武徳殿の活用についての一考察 「高雄市武徳殿」での剣道実践者を対象として

*三宅 智子¹(1. 天理大学 大学院 体育学研究科)

台湾には、約50年間の日本統治時代に武道の普及目的の為に、約200棟を超えるほどの多くの武徳殿が建設された。しかし、戦後を経て消失しているものが多く、今なお現存する建築物は12棟となっている。その中でも「高雄市武徳殿」は日常的に剣道を実践しているという点では台湾内において、唯一の歴史的建造物として注目に値する。高雄市武徳殿は、1999年に市の指定史跡となった。その後、台湾政府による「文化創意産業」政策が大きな引き金となって、日本統治時代の建物の修復保存が盛んに行われるようになった。現在でも、高雄市旧市街地には日本統治時代の建築物が多く残っており、高雄市武徳殿もその対象に含まれている。その武徳殿の活用・保存方法については、地元の名士が高雄市政府文化局と連携しながら、台日文化交流イベントとしての剣道大会、日本文化体験、さらには主として剣道実践での活用ができる場に創り上げていった。現在では、高雄市武徳殿は市の重要な文化資産として位置づけられていることがわかる。

本発表では、この高雄市武徳殿で日常的に剣道実践の場として活用している人達を対象とし、①剣道の指導的立場として活用している人々、②練習生の立場として活用している人々（初心者とその保護者及び経験者ら）がどのようなきっかけで武徳殿に関わり、剣道の指導及び練習に参加しているのか、又剣道に何を求めているのかを明らかにする。とりわけ高雄市武徳殿を活用する意味について明らかにしていきたい。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：スポーツ人類学

📅 2025年8月27日(水) 9:40 ~ 10:38 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1101-03] スポーツ人類学／口頭発表①

座長:中嶋 哲也(茨城大学)

10:20 ~ 10:38

[12人-口-03] 民俗芸能の衣裳・装備の変遷におけるスポーツ人類学的一考察

長野県南伊那地域の屋台獅子の活動を中心に

*松本 彰之¹ (1. 飯田短期大学)

本研究は、長野県飯田市を中心にした「屋台獅子」という民俗芸能の活動を取り上げる。「屋台獅子」は大型バス程の獅子の体躯内部に囃子手が、外部の獅子頭から体躯につながる部分に舞手がつき、一台に総勢数十名が関わる江戸期から継続して行われている獅子舞である。「屋台獅子」の舞手や囃子手らは揃いの法被やタツツケ袴等の分担の活動別にそれぞれおそろいの衣裳を着用する。これらの衣裳や獅子頭、幌、ハナ等の獅子の装備が、この地域の地場産業と深く関連していることは、すでに報告した。ただ、この地域で誕生した「屋台獅子」の衣裳・装備の働き及びどのような変遷を経て現代に至ったのかについての経緯は、未だ具体的に示されていない。これらの衣裳・装備は、民俗芸能の身体活動に直接影響するものであり、これらの文化的価値の根幹に関わる重要な構成要素である。活動に伴う身体運動に適した素材や構造になっている可能性が大きいと推測された。そこで、本研究では各地域の「屋台獅子」の各団体が、それぞれの活動において、どのような衣裳・装備を準備してきたのかについて、その実態を調査しその変遷を明らかにすることを目的とした。フィールドワーク及びインタビュー等の人類学的方法により、屋台獅子を支える側の人びとへの調査を行ったところ、染色業及び織物業といった従来からの地場産業に加えて、呉服商や呉服問屋が業態転換し祭り物品卸業などの新たな業種の人びとが、飯田の民俗芸能である「屋台獅子」を育み支えてきた実態が明らかとなった。この地域の獅子は、生涯にわたって年齢階梯制に基づく各組織に所属する鼎地区の人びとの相互の関わりとつながりものである。人びとは、獅子舞を共通の宝としながら、関わりを続ける。この地域システムの支えにより鼎地区の人びとは守られ、生涯にわたる健康でいきいきとした生活は、この安定した地域システム支援の「継続性」によって現在も維持されている。